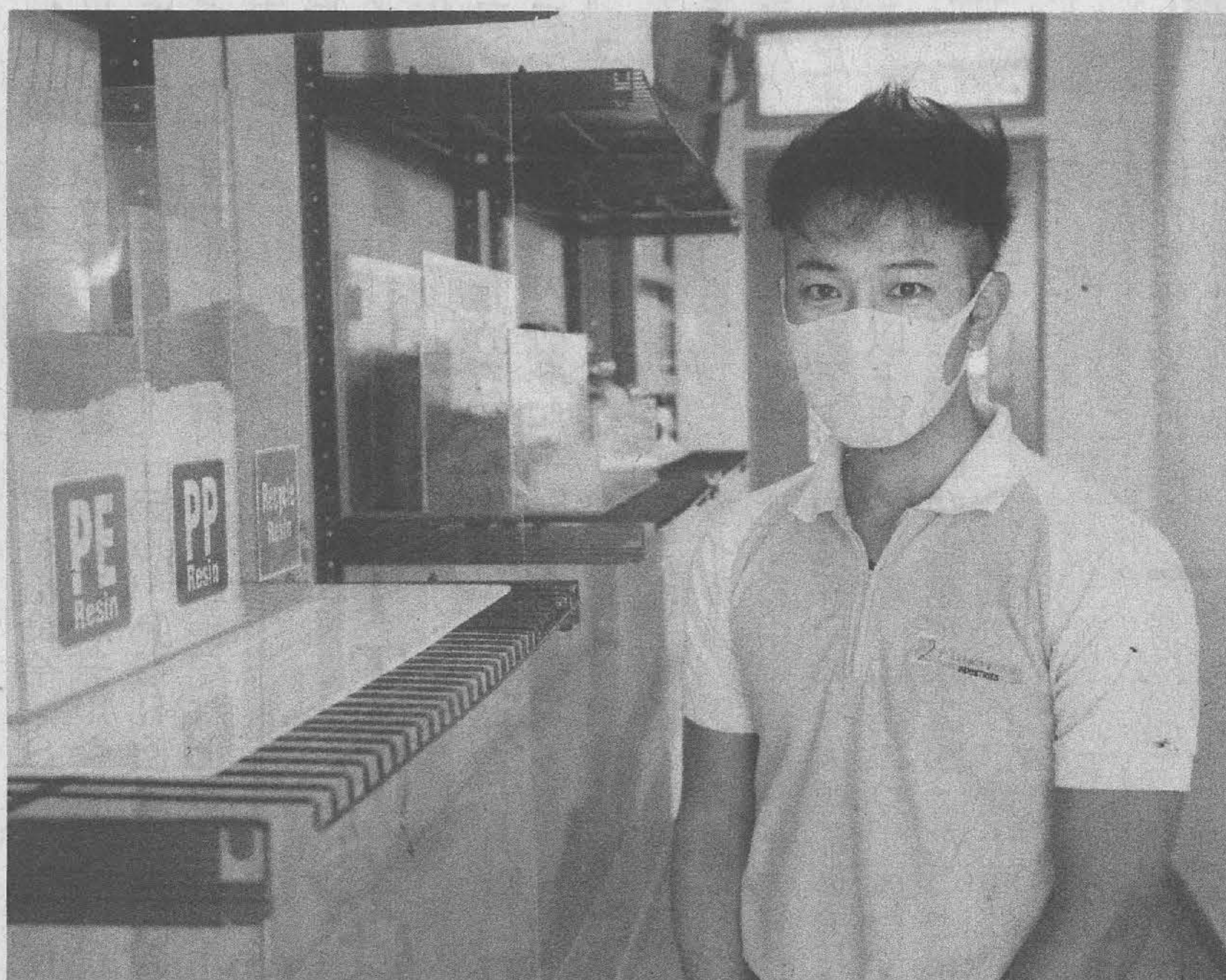


日本一のブルーシート生産量誇る萩原工業。だが、その現地法人ハギハラ・ウエストジャワ・イン



コロナ時代に立つ

進出企業の現在

14

形変え、広がる技術

合成樹脂繊維の萩原工業

ト補強材が主な製品だ。また新型コロナウイルスの感染拡大を受け、医療防護服の生産にも携わる。岡山県倉敷市でのゴザづくりから始まった同社の技術は海を越え、形を変えて広がっている。

「糸を造る、織る、ラミネートする。これらの技術を派生させて新製品ができる」。HWI社長の石田慎和さんはそう説明する。ルーツには繊維産業が栄えた倉敷市で、イグサや綿糸を織って作られていたゴザが

ある。48年前、品質を安定させるため縦糸をポリエチレンで代替したことから萩原工業の歴史は始まった。このポリエチレンからできた細くて強い糸「フラットヤーン」で織ったものがブルーシートとなる。今では化学繊維製品と機械製品の大手メーカーだ。

その歴史と技術はインドネシアにもつながる。国内向け主力製品の紙袋は一見何の変哲もないが、内側に合成樹脂繊維が織り込まれたシートが張られている。紙と組み合わせることで袋の強度を高めているのだ。工場で顔料やコンパウンドなどの包材として使われ、月約200万枚を売

紙袋は基本的に1回使い切り。地場の競合企業は再生紙をHWIの紙袋。内側には不純物のない透明なシートが貼られている

利用したり、内側のシートに炭酸カルシウムを混ぜたりして価格を落とす場合もある。一方でHWIは紙を日本から輸入し、再生紙を使わない。内側のシートはポリエチレン、ポリプロピレン100%にこだわる。また顧客が紙袋に入れるものによってシートの繊維量を変え、強度と価格を調整する。さらに紙袋の「閉じ方」も内容物の細かさに応じて縫合とのり付けに分けたり、二重袋にしたりと細かく対応する。

石田さんは「あくまで（競合と）価格ではなく、機能性、品質で勝負するところが重要」と強調する。新型コロナウイルスの感染拡大で4〜6月にかけて、通常月20〜30万袋を売っていた二輪・四輪関係の注文がなくなってきたが、7月から徐々に回復してきた。一般消費財など他の業種での売れ行きは堅調だという。

また培ってきた技術は地場企業からも頼られ、医療用防護服に使う布のラミネート加工の注文も舞い込んだ。不足が騒がれた4月か

ら5月にかけては大量の注文に対応するため休日のシフトを増やすなどした。だが6月からは1千枚とされる国内の必要数を供給が5倍以上も上回るようになった。注文はストッパー。現在は政府が発注先を選定する段階に入っているという。石田さんは「供給された防護服の中には基本的な機能を満たしていないものもあった」とし、政府の動きを歓迎。品質面で同社が携わる防護服が評価されることに期待している。

新型コロナウイルスが収束した先には、合成樹脂繊維を使ったコンクリート補強材「バルチップ」の国内販売を進めていきたい考えだ。鉦山

採掘現場や鉄道のトンネル、高架道などで使われる製品で、世界的に利用されているが、製造のメインはインドネシアだ。2013年にはカラワン県に専用工場を新設していた。萩原工業はこの製品で日本の経産省が選ぶ「2020年版グローバルニッチトップ企業100選」に入っている。国内ではチカンペック高速道の高架の一部に使われたが、まだ実績は少なく、海外への輸出が主だ。石田社長は「インドネシアはまだこれから道路を作るなど、インフラを開発する途上にある。首都移転計画にも期待したい」と話した。（大野航太郎、写真も）